藪医者の病院

澄水

薄汚れた、ボロボロの白衣を身に纏い、聴診器を首から下げて病室のドアをノックし、手を掛けた。

病室にはベッドが三つ並んでいた。白い蒲団が敷かれていた。純白ではなく、薄く黄ばんだ白。カレーをこぼしたようなものとは違い、古さを感じる黄ばみだった。

ベッドの横には机が置かれ、間仕切りでお互いが見えないように仕切られていた。

それ以外は何もなく、クリーム色の床と壁が一面にあるのみだ。窓さえもない。否、窓はあった。この病室を使い始める前に布で塞いだだけである。そこから、光が漏れていた。

「先生、おはようございます」

病室のドアを開けるや否や、一番手前のベッドで寝ていた女の子が挨拶してきた。歳は十六だと記憶している。髪は長かった。ただ、ボサボサでツヤはよくない。相当痛んでいる。名前は皆木桜。この部屋で一番長い患者だ。元々足が悪くて歩けないようで、現在は原因不明の病で多分先は長くないだろう。それでも、病室で元気にふるまっている。

ただ、今日は普段と比べても元気が良い。表情はどこか晴れやかだった。

「おはよう。そろそろ朝ごはんだよ」

そう僕が言うと、間仕切りの向こうからも反応があった。

「いい加減腹減ったよ」

「先生、スープ飲みたい」

僕は間仕切りを壁の方へと移動させた。

残り二つのベッドには、手前から小学生ぐらいの男の子と女の子がいた。

手前の男の子が住吉泰一。小柄で、体の線もやや細い。泰一はこれまた原因不明の病で体が弱く、食事で手を動かすぐらいしかできない。

一番奥の女の子が阪野美樹。泰一と比べればやや身長もあり、ふっくらとしている。それでも、一般的な小学生に比べたら細いはずだ。この子も原因不明の病気で体が弱く、ベッドから出ることもままならない。

仕切りがなくなり、広々とした病室の机に今日の朝食を並べた。

「いただきます」

僕を入れた四人の声が重なった。

「先生の服っていつもボロボロだね。新しいの着ないの？」

朝食を食べている途中、美樹から質問が飛んできた。僕の視線が少し泳いでいるのが自分でも判った。一呼吸置いてから答えた。

「お父さんも医者だったんだ。この白衣と聴診器はお父さんの形見だから、捨てられないんだ」

食事の間も桜は笑顔で、少し落ち着きない様子だった。

「どうした、妙にニコニコしてるけど何かあったか？」
何となく尋ねると、桜は不機嫌そうに箸を置いた。
「今日……」
美樹の表情に呆れが見えた。泰一も苦笑い。
このパターンの時は、大抵僕が大事な事を忘れている時である。桜の表情にあった明るさは陰っていた。
「ごめん、今日は何の日だっけ？」

＊

僕はこの病院で藪医者をしている。藪医者だから三人の病気が原因不明であって当然だ。風邪ひとつ診断できず、原因不明の咳となるであろう。
藪医者ではなく無免許診療とでも表現するべきであろうか。僕は医師免許など持ってなどいない。むしろ、詐欺師やペテン師の類だ。
無免許だが、捕まりはしない。
金は取っていないし、訴えられる可能性もない。それに捜査の手が及ぶ可能性もない。……誰が捕まえようというのだ。

僕は廊下を歩いていた。クリーム色のタイルが敷き詰められた床の上を厚手のブーツで歩く。重厚感のある音が壁に当って反響する。窓は段ボールや布で覆われていたため、部屋は薄暗い。
二階のつきあたりは、白い布が壁のように立ちはだかっていた。厚く、重々しい布一枚。風でめくれないように、下の部分はコンクリートブロックで踏ませてある。
そのコンクリートブロックを除け、布一枚めくった。
眩しい日光が目を刺す様だった。
その次に飛び込んできたのは崩落した廊下だった。僕の一メートル先は壁も無く、床もなく、外界に繋がっていた。
空は青かった。海のように青く広がっていた。鳥は元気に飛び回っていた。
その遥か下に、崩れたコンクリートが瓦礫となっていた。この建物のものではない。かつて街であった部分全てがそうであった。視界に建物は数えるほどしかない。
人の姿は見当たらない。

最初、僕は子どもを集め、あの部屋にベッドを六つ入れた。あの瓦礫の山で動けなくなっていた子をベッドで寝かせ、食べさせるだけのつもりだった。ボランティア感覚だったのであろう。当時は若かったのもある。
後に、内四人は『病室』に来るまでの記憶がないとわかった。そして彼らは僕を「先生」

と呼んだ。そうして元理髪店経営者は医者にされた。
全て知っていた二人は無菌室という名の別室に移した。
一人は素人でもわかる程危険な状態となり、集中治療室という名の別室に移した。その後、彼は退院した事になっている。

瓦礫の上を歩き、何かを探していた。最初の頃は、人もいてスラムや闇市などもあったが、今では闇市もできない。
背中にはベージュの登山用リュックサックを背負っていた。リュックの中はペットボトルが殆どのため、たくさん拾えないが、今日は何かを必ず持って帰らないといけない。
そんな時、足元に赤と青と白がねじれた円柱形の看板を見つけた。
「そうだ、これにしよう」
僕はその周辺のコンクリート片をどかし始めた。

＊

時間としては昼過ぎ、午後一時といったぐらいだ。日は真上を少し過ぎた。昼食の時間だ。
窓もない、ベッドと机しかない病室に昼食を持って行った。
トレーの上に乗せられたのは小さい、表面が真っ黒になった焼き鳥と不格好なサラダだった。
「先生、焼き鳥なんて久しぶりだよ」
「焦げてるけどおいしそう」
「焦げてるは余計だ」
泰一と美樹は声のトーンが少し上がっていた。喜んでいるのが良く分かる。子どもらしい笑みを見て安心した。
「僕の安月給と少ない病院の金じゃ、小さいチキンが精一杯だ」
僕の運動神経と知恵では籠の罠を仕掛けるのが精一杯だ。
泰一と美樹が喜んでいる一方で、桜の表情が曇ったままなのは変わらない。焼き鳥ごときで機嫌を取るつもりもないが。
「先生、北京ダックを用意したという事はもちろん……」
泰一は早速僕に促してきた。
「これは北京ダックじゃないよ。ただのチキンさ。それに北京ダックといえばクリスマスだろ」
これはチキンではない。ただのカラスだ。そういえばもうすぐ冬が来る。そろそろ備えておかなければ。
しかし、今日はそんなこと忘れて、ただ祝福しよう。あと何回出来るかわからないのだから。

「桜、誕生日おめでとう」
「一言？」
桜より先に美樹が反応し、首を傾げた。
「ありがとう、先生」
桜は春のような温かさを感じる笑顔になった。
十分で食べ終わってしまった。おかわりもない。不満げな泰一を余所に僕は桜に言った。
「桜、僕からプレゼントがある」
僕は桜のベッドの横に錆で出来ているかのような折り畳み式の汚い車いすを開いた。ギシギシ、と金属の擦れる音が耳を劈いた。
桜を抱え上げて、車いすに座らせた。
車いすをゆっくり押し、プレゼントのある部屋へと向かった。
「先生、ありがとうございます」
「まあ、これぐらいしかできないからな」
そこは、病室の四つ隣の部屋。
三つのベッドが端に寄せられていた。部屋の中央には椅子が一つと鏡台が置かれていた。
車いすが部屋に入ってから桜は自ら、車いすから降りた。
立てないはずの桜が立っていた。
「先生、私、本当は歩けるようになったんです」
本来ならば喜ぶべき所だが、素直に喜べない。むしろ、胸に突き刺さる物を感じていた。何かが重くのしかかってくるような感じがした。
「それで、先生のいない間に、見たんです。外」
「そうか……」
「理由も思い出しました」
「嘘ついていて悪かった」
「いいえ。先生が外の話を楽しそうにしてくれたおかげで希望が持てました。はやく楽しい世界を見てみたいって思って、歩けるようになりました」
結果、絶望する事になった。
桜は目じりに涙を浮かべていた。
「本当にすまない」
桜はただ、明るい笑顔のままで椅子に座った。
「お願いします」
「ああ、綺麗にしてやるさ」
この部屋は、雑菌だらけの無菌室であり、手術のできない集中治療室でもあり、美容室でもある、ただの部屋。
この部屋でできる事は、まだあった。